

Cleveland 'CLEVIE' Brownie

interviewed by Ayako 'Iyah' Knight

2009年9月1日、ワイクリフ・ジョンソンa.k.a.スティーリーは、私たちを永遠に魅了し続ける莫大な量の名曲を残し、この世を去った。キーボードに向かい、宙を見つめながら音の世界を旅しているように演奏するスティーリーを、私は心の中で勝手に「音職人」と呼んでいた。スティーリー&クリーヴィー、通称スティクリ、奇跡のダンスホールプロダクションデュオ。彼らの生み出した音は‘80年代の音’の代名詞であり、「現象」だった。スティーリーが亡くなった時に80%まで完成していたというニューアルバム‘Memories’が来年リリースされる。皮肉にも私たちはスティーリーとの「思い出」を重ね合わせながらそのアルバムを聴くことになってしまった。相棒クリーヴィーが二人の思い出を辿るように時間をかけて話をしてくれた。このロングインタビューを本誌で二回に分けて掲載。Give thanks,スティーリー&クリーヴィー！

まずはじめにスティーリーの死にお悔やみを申し上げます。クリーヴィーとは子供同士が友だちですし、仕事でもブラウニー家とリンクが多くとてもお世話になってます。今日はよろしく。  
ありがとう。

私がスタジオでスティーリー会った時には、また復活して今のダンスホールにオリジナルコンピューターサウンドを教えてやる、って息巻いていました。たしかU-ロイだったかな。  
そう言った？(笑)多分、ジョジー・ウェールズだね。

とても残念ですが、同じ時代を少しでも共有することができ、たくさんの音楽に感謝しています。

スティーリーは永遠に生き続ける。僕がスティーリーの死から学んだことは、僕たちは今この瞬間、周りの人間を本当に大切にしなければいけないってこと。後でわかったんだけど、彼は病気のことをずっと隠してたんだ。それでもスティーリーは強いスピリットの持ち主だから、ベストを尽くしていいエネルギーを出し続けていた。普通にしていたけど、医者にかかったときにはすでに驚くほど状態は悪かった。

彼の唯一無二の才能はもちろんのこと、いつでもフランクでフレンドリーな人柄も素晴らしかったですね。

本当に。ただスティーリーは音楽に関しては、なんでもOKなイエスマンではなかった。心理作戦を使ってグッドをベターにすることができる奴だった。シャバはボイスルームに5時間こもって‘Ting A Ling’と一緒にレコーディングした。世界市場に通じる音質でハードコアでストレートなジャマイカのダンスホールを作った。シャバは時間を惜しまず共同で作業できるアーティスト。アーティストにとってプロデューサーに耳を傾けることはとても大事なこと。

〈Sleng Teng〉以降のコンピューターライズド・ブームを発信者としてどう感じましたか？

スティーリーと僕に、そのブームの責任があるね！ もちろん嬉しかったよ。俺たちはコンピューターにどんな音を入れたら、どんな音が出てくるか分かってた。マシーンにソウルを入れるには音楽を知らなかったらできない。音楽には人間らしい‘Feel’が必要。それと当時、音楽制作が経済的になったことも事実。コンピューターによって、才能はあるのに大きなスタジオを借りたりする余裕のないプロデューサーやミュージシャンたちが制作できるようになった。

〈Punanny〉や〈Unmetered Taxi〉などたくさんのヒット・リディムを作るインスピレーションはなんですか？

今までのたくさんの音楽体験し吸収し、僕らの存在自身が影響を受けた音楽のつぼとなって、僕らのなかに秘めてるソウルを引き出してくれた。自分たちが誰に向けて発信したいのかも意識してた。僕らは流行をセットするのが好きなんだ。流行ってる曲を聴いたりしてそこから何かを作ろうとしたことはない。

たくさんの古いリディムをリメイクしていますが、その魅力と理由は？

昔から名曲をリカットするのは、ジャマイカ音楽の文化のひとつ。いい曲は時代に関係なくヒットする。いい曲を今の世代に合わせてリメイクして新しいものにし、若い世代に紹介する。あまり最近出た曲をすぐにリメイクするのはよくない。いい曲を再度、世に発信する感じ。歴史を受け継いでいく方法で、音楽を生き続けさせる方法。いい曲には印税が入るべきだしね。昔のアーティストは印税がきちんと入らなかったから古い曲がリメイクされることによって、印税が入るようになるし。

今、リメイクの曲を集めたアルバムを作ってるそうですね？

スティリーが亡くなる前、僕らはアルバムを作ってる最中だった。すでに80%くらい完成してた。‘Memories’っていうタイトル。今は完全にそのアルバム制作に集中してるよ。スティリー&クリーヴィーを生むインスピレーションになった曲や、僕らが音を学んだ曲を集めてリメイクした。来年リリース予定。

スティリーの追悼も込めて‘Memories’というタイトルに？

いや違うんだ。もともとは、僕らの昔の曲の思い出ってことでこの名前をつけたんだけど、結局そこに彼の思い出が足されることになってしまった。スティリーがつけたタイトルなんだ。Memories(記憶・思い出)といえば、スティリーは写真のように正確な記憶力の持ち主だった。例えば、紙に100桁の番号を書いて彼に数秒見せただけで全部数字を覚え、後ろから言ったり、どの数字が大きかったとか、32番目の数字は何とかまで言える！一度、元CIAだった人にスティリーと一緒に会ったら、その人にすごい才能を持ってると認められてた。(笑)完全に正確な記憶力！信じられないよ。イメージを焼きつけるような感じだった。自分の意思でそのイメージを削除しようとするまでは頭に焼きついてるんだって。

彼はリアルなコンピューターブレインだったんだね・・・。

そう、コンピューターブレイン！(笑)人生で演奏してきた曲全部、あいつは覚えている。キー、テンポ、なんでも。だからスティリーは、僕のデータベースでもあったんだ。(笑)気持ちを切り換えなくてはって思うけど、やっぱりスティリーが去って本当に寂しいよ。

2人のコンビネーションにはケミストリーみたいなものはあった？

「理想的な結婚」って言葉を知ってる？ もちろん僕らはストレートだけど(笑)、音楽的にはまさに理想的な結婚だった。12歳の頃から、スティリーとは音の考え方や感じ方が似てると確信してた。もし僕ら別室に入れて曲を100曲かけたら、絶対気に入る曲が同じだよ！2人とも誰かと同じことをするのでなく、自分なりペースをセットするのが好きだった。ストリートスーパースターをリリースしたときも、テンポが100bpm以上になってた時代に、僕らは84bpmまでスローダウンした。速いのが悪いわけではなく、速いものとスローなものが共存できると信じてたんだ。スカ、ロックステディ、レゲエと変化したけど僕はすべて共存できると信じてる。それで市場は更に広がるわけだし。だからずっと僕らはダンスホールリディムのシンガー物も出し続けてきた。F.マクレガーの

Prophecy、D.ペンの No No No、F.ブラウンの Baby Can I Hold You Tonight、これは初のビルボードチャート入りにもなった。G・シルクやブッシュマンなどのシンガーともレベール契約を結んでた。

## 2人の初来日はいつ？

レゲエサンスプラッシュ'84年。日本で皆が歌を覚えてることに驚いたよ。あの時日本へ行って、文化が交わる姿を見ることができたことは、本当にいいインスピレーションだった。

## 2000年以降のダンスホール(トラック)をどう感じていますか？

新しい世代のクリエイターとリスナーがいる。作り手は受け取る側とコネクトするべき。ダンスホールを生んだ僕らが言えることは、ダンスホールはビート。今ジャマイカでダンスホールって定義されてるビートは実はダンスホールじゃないものが多い。あのビートには、なにか新しい名前をつけた方がいい。ただ、プロデューサーのなかには古いダンスホールのビートへ戻ってる人もいる。それはすごくいい。ダンスホールをヒップホップとミックスしすぎると、今まで築き上げてきた100%ハードコアなジャマイカ音楽の遺産を失うことになる。ワナビーなヒップホップの音ではアメリカ市場には絶対に入り込めない。詞のカルチャーも違うし、ジャマイカ国内の小さな箱に入ったヒップホップは絶対に通用しない。

逆に、スティリー & クリーヴィーのハードコアダンスホールのビートは、KRS-ONEなどヒップホップの方に影響を与えてましたよね？

そう。JIVEレコードのリミックスのレコーディングをたくさんやった。テッド・ライリーとか多くのヒップホップのプロデューサーが僕らのスタジオ作業を聴きにきて、学んで行った。ヒップホップとの融合は悪いことじゃないが、レゲエの基礎と要素をキープするべき。

## テクノロジーも発達し、「音」自体が変わってきているけど、どう捉えてる？

24トラック2インチテープに録音してた頃とは完全に変わった。今のリスナーは皆、mp3で聴いてる。音質ってオールドスクールを経験したものだけが分かるのかも。何が違うの？と思う人もいるのかも。今は、もしかしたら音より歌重視なのかも。結論は一番大事なのは曲そのものってこと。世界一高価な設備を持ってても曲が悪かったらヒットしない。いい音質で、どれだけリスナーの耳を育てていくかだと思う。ラジオでさえ最近は

mp3だし、リスナーはそういう音質の環境に慣れて、そのうち「いい音」自体を知らなくなってしまうのかも……。

この先、ダンスホールはどんな進化を遂げていくと思う？

ダンスホールには、聴いた者が自然と体が動いてしまうグルーブが必要。歌詞は世界中の人が自分を重ね合わせられるものでないといけない。ジャマイカは多人種、多文化の国。世界の縮図のような小さな島を、音楽で癒せたら世界を癒せる。ボブがワンラブと言ったように、愛こそ僕らが広げていくべきメッセージだと思う。

今日は本当にどうもありがとう。日本のファンにメッセージを。

スティーリーに代わって……僕らは日本人を愛してる。俺たちを受け入れてくれたことを誇りに思ってるよ。これからもサポートしつづけてほしい。日本は遠いけど、日本人とは、ひとつだと思ってるよ。